明石の史跡（１３）瓦屋平次郎と須磨寺

享保１６年（１７３１）正月１８日、須磨寺では護摩堂再建への釿（手斧＝ちょうな）始めがおこなわれた（以下とくに出典を明記しない場合は、『須磨寺「当山歴代」による』）。

この護摩堂は、慶長大地震により倒壊したもので、５０年の歳月を経過して、ようやく再建の対象となった。慶安元年（１６４８）１０月１７日に、奉加帳を廻しての資金準備がなされ、翌２年（１６４９）１月４日より建立にかかっている。多井畑などの普請合力を加えて、落成をみたことであろう。

ところが万治２年（１６５９）５月２２日、寺全体が大洪水（山津波か）に見まわれ、不動院・蓮生院・梅本坊・東蔵坊は土中に埋没。それ以外の建物も土砂の流入は避けられなかった。記録には見えないけれども、護摩堂もなんらかの被害をうけたことと思われる。

万治の災害から７１年、三間四面の護摩堂再建願いが提出された。作業開始の直前の正月１２日、山田庄（北区）木挽き仲間と、兵庫西の柳原善太郎なるものが、細工について意見の相違か、境内において狼藉に及ぶというトラブルも発生。三木郡の木挽きに依頼することになった。

瓦については、明石東新町の瓦屋平次郎が請負、土は播州山田村（垂水区）より調えている。東新町というのは、現在の相生町１～２丁目にあたり、天和２年（１６８２）には西新町や新浜とともに、惣町に編入され、享保６年（１７２１）には、家数１４５、人口は６３４人を数え、そのなかに御用瓦師（明石藩）として、伊左衛門と長右衛門の名がみえる（兵庫県の地名Ⅱ）。寛延３年（１７５０）５月から７月にかけて、本堂（５間４面）の瓦を焼いたとき、明石の瓦屋（姓名不詳）が、再度山田村から土を運んでおり、その活動の一端を知る事ができよう。

相生町 1～2 丁目

日本歴史学会会員 茨木 一成